様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３７１０９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ２１５５６

研究課題名（和文）貧困・生活困窮者の＜自立＞と共同性に関する実証研究

研究課題名（英文）Empirical research on the relationship between communality and independence of person in need

研究代表者
益田　仁（Masuda, Jin）

中村学園大学・教育学部・講師

研究者番号：２０５５１３６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、貧困や生活上の困難を抱えた状態からの脱却過程において、他者とのつながりや集団への所属（共同性）が果たす役割を実証的に解明することであった。主な研究成果は次のとおりである。①子育て世帯の経済的はく奪や養育上の困難に特に着目し、生活上の様々な“困りごと”により、地域社会や学校から排除されていくプロセスを明らかにした。②その上で、そうした親や子に対して地域社会における支援が形成される条件と、共的な場が果たすポジティブな役割を明らかとした。本研究成果は、制度的対応だけでは満たしきれないニーズに対してどのようなサポートが効果的であるのかを部分的に示していると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で示されたのは、地域にある社会福祉施設、地域住民、学校、社協、行政等の有機的な連携からつくられた場が、子育て世帯の福祉的ニーズに対して効果的に機能したことである。このこと自体は既存の研究で指摘されてきたことであるが、本研究が示唆するのは、特に社会福祉施設（特別養護老人ホーム・よりあいの森）と地域住民のつながりの強さであり、「目の前のひとりの人」の困りごとに徹底して寄り添う社会福祉施設の実践が、地域の福祉力を底上げしている側面であった。このことは、学術的には地域レベルでの福祉活動における住民の組織化の一形態として、また社会的には新たな子ども家庭支援の一方法を示すものであるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to disclose the role of communal relationship--belonging to social group, one’s networks--of the people in need. Especially, focusing on the economic deprivation or upbringing hardship of child-rearing family, this study revealed the process that people are excluded form the community or school. What was observed from continuous case study is kind of “new type” of support at the local “new” community. The core of the new one is existence of social welfare facility and the relationship between facility and local resident.

研究分野：社会学

キーワード：貧困・生活困窮　共同性　ネットワーク　地域　居場所　養育困難　不登校、発達特性　ひきこもり

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）研究当初の社会的な背景として、グローバル化や産業構造の変動が雇用と所得の 2 極化の力学を生み出し、そのため中間層が減少して貧困状態に置かれる人々が増えつつあり、既存の社会保障システムがこうした状況に対して十分に機能していない状況があった。特に先行研究においては、社会保障システムが機能不全を起こしており、「働くこと」「子を育てること」を罰するような仕組みの社会となっていることが指摘されていた。そこで、特に社会的不利益を被っている、貧困・排除など生活上の困りごとを抱えた子育て世帯を対象とすることとした。
（２）また、学術的ねらいとして、貧困や生活上の困難を抱えた人々の＜自立＞過程において、他者とのつながりや共的な場がもつ機能、役割を、その具体的なメカニズムや条件とセットで明らかとすることで、再生産論に動的な視点を組み込むことが期待された。

２．研究の目的
本研究の目的は、貧困・生活困窮状態からの脱却過程における共同性の意義・役割を実証的に解明することであった。先行研究では、社会関係が生きがいや生きる意味をもたらし、それが＜自立＞へと向かうモデルが示されていたが、その具体的なメカニズムは十分に解明されていなかった。そこで、どのようなかたちの共同性が、どのようなものを人々の内面にもたらし、どのような社会的帰結がもたらされているのかについて、①貧困ないしは生活上の困りごとを抱えている人々、②そうした状況におかれた子どもへの調査から明らかとすることを目指した。

３．研究の方法
研究目的を達成するため、以下の調査を実施した。
・学習支援教室に通う生活保護（あるいは生活困窮）世帯の子どもへの調査（2016 年）―小学生 10 名、中学生 3 名へのアンケート調査（他記式・面接調査）を行った。調査内容は主に、子どもたちの生活の様子・社会関係・自尊感情や他者への信頼感などであり、つながりや共同的活動が、生活や将来展望にどのような影響を及ぼしているのかを把握した。
・地域子育て支援拠点事業を利用する保護者のネットワーク調査（2018 年）―子育て中の保護者 46 名へのアンケート調査から、社会的なつながりや育児サポートの獲得状況、困りごとの内容等を把握した。
・子どもと親の居場所 A におけるフィールドワーク（2020～2022 年）―福岡市にある子どもと親の居場所 A に参画し、生活上の“困りごと”を抱えた親や子が、居場所におけるつながりや共同活動がもたらすものと、その場の形成条件を把握した。

４．研究成果
（１）総じて、共的な場や社会的なつながりが、自尊感情を回復させ、心理的安定をもたらすなど、ポジティブな効果を持つことが確認された。もっとも、共的な場へのアクセスの問題、そこにおける排除の問題を考える必要性も示唆された。
→根拠となる業績：雑誌論文業績１，２，３および学会発表業績１，２，３，４

（２）共同性が個人にもたらすものは、主体内在的なものに留まらず、それらを足掛かりとして、生活上の困りごとを解決しようとする意志を醸成し、他者への相談をうながし、また他の集団への参画を後押しすることが、親においても子においても確認された。
→根拠となる業績：雑誌論文業績１，３および学会発表業績１，４

（３）本研究で実施した 3 つの調査のうち、特に子どもと親の居場所 A の調査から、地域において共的な場が立ち上がるプロセスとその条件を明らかにした。端的には、地域住民（ボランティア、民生児童委員、校区社協、育児及び高齢者サロン実践者等）と社会福祉施設（特別養護老人ホーム・よりあいの森）の密な関係性がベースとしてあり、地域住民の“困りごと”（生活困窮、養育問題、孤立、不登校等）が生じた際に、関係者ネットワーク（校区担当 CSW、学校 SSW、行政等）を駆動させながら問題を解決していた。特に、社会福祉施設の実践が地域の福祉力を底上げしていることが見て取れた。
→根拠となる業績：学会発表業績１，４

これら 3 つの知見は、ネットワークやつながりなどを形成する場の重要性と、その条件の一端を示している。この知見を敷衍するならば、様々な生活上の困難からの脱却過程においては、個別的な援助のみならず、共的な場や関係性が効果的であると言えるだろう。奇しくもコロナ禍により様々な場面におけるつながりの構築が難しくなったが、それらがどのような影響を及ぼしたのかを今後調べることにより、上記の知見の妥当性を検証することができると考えている。
また研究当初の学術的なねらいとして、再生産論に動的視点を組み込むことを挙げていたものの、その点は十分に達成されたとは言えないため、今後の課題としたい。しかしながら、研究

を進めていく過程でせり出してきた地域におけるサポートという視覚に関しては一定の有意義な知見が得られたと考えている。

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 益田仁・菅祐子	４．巻 11
２．論文標題 地域子育て支援拠点事業利用保護者のサポートネットワーク――福岡市城南区子どもプラザを事例として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中村学園大学発達支援センター研究紀要	６．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 菅祐子・益田仁	４．巻 11
２．論文標題 城南区子どもプラザ利用保護者への調査結果報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中村学園大学発達支援センター研究紀要	６．最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 益田　仁	４．巻 44
２．論文標題 特集「社会福祉と共同性（体）」解題	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『社会分析』	６．最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 益田仁
２．発表標題 子育てにおける“困りごと”への地域的サポート――福岡市城南区別府・田島・茶山界隈の場合
３．学会等名 西日本社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 益田仁
２．発表標題 社会の変容と子育て／子育ち環境の変化――マクロ要因の整理
３．学会等名 日本社会分析学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 益田仁
２．発表標題 地域的多様性と育児――福岡市と徳之島を事例として
３．学会等名 日本家族社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 益田仁
２．発表標題 学校から＜排除＞された子にとっての学校と地域の場――発達特性をもつ子の保護者へのインタビューから―
３．学会等名 日本社会病理学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 益田仁（分担執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 288
３．書名 第5章「教育で貧困の世代的再生産が防げるのか」、三隅一人・高野和良編著『ジレンマの社会学』	

１．著者名 益田仁（分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 みらい	５．総ページ数 224
３．書名 第5章「『未熟』な若者がフリーターやニートになるのか？」、友枝 敏雄・山田 真茂留・平野 孝典編著『社会学で描く現代社会のスケッチ』	

１．著者名 益田仁（分担執筆）	４．発行年 2018年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 266
３．書名 「家庭（世帯）の貧困と子どもの貧困」、「子どもの貧困」に向き合う人々著・大西　良編著『貧困のなかにいる子どものソーシャルワーク』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フィンランド	トゥルク応用科学大学	東フィンランド大学		